



インカレでベスト8入りした古川かれんの形



今後の活躍が期待される中野力斗



小林和司部長



高瀬智亨監督



栗田秀哉主将



第39回 空手部

紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji.*

—明大体育会の系譜—

文・撮影／菊地武顕
写真提供／明大スポーツ新聞

空手の「スポーツ化」を推進
今日の隆盛の礎を築いた

武道だった空手にスポーツとしての要素を融合させ、今日のような大会が行なわれるようになったのは、今から60年ほど前のことである。

高瀬智亨監督が説明する。

「武道としての空手は、どちらかが立ち上がれなくなるまで戦うものでした。試合などをしたなら互いに殺し合うことになると考えられ、昔は大会などはなかったんです」
空手普及の契機となった「スポーツ化」に、明治大学空手部は大きな貢献をした。

空手部は、1935年（昭和10年）5月に「明治大学予科唐手研究会」として発足。38年には四大流派のひとつ、和道流の大塚博紀師範を迎えて発展を遂げた。

41年に体育会に公認されたことを記念し、駿河台の記念館で全日本学生空手道演武大会を実施。四大流派の主要15大学が技術を披露した。これは当時の空手界にとって、画期的なこと。大会がないため、大学間、とりわけ異なる流派の大学間において、交流は乏しかったからだ。終戦から5年後の50年にはやはり記念館

に全流派20数大学が集まり、戦後初の全国演武大会が開催された。

第1回全日本で優勝

やがて、佐藤八十雄、堀口健一（共に42年卒）や他校のOBが定期的に会合を持つようになり、学連誕生の機運が盛り上がっていった。55年10月に明治大学道場で、拓殖大学、慶應大学、明治大学3校によるリーグ戦が行なわれ、他校もこれを観戦。これにより試合化が可能だという認識が高まって、57年11月に旧両国国技館で第1回全日本学生選手権が開催された。

栄えある第1回覇者は、明治大学。当時の主将・岩井達（58年文卒）は、〈旧両国国技館の万雷のどよめきのなかでの優勝の瞬間は、極めて平静そのものであり、ただ、「これで終わった」という感じだけであった。しかし、賞品授与式で、優勝杯を手にした時には、
「俺達は空手部に新しい伝統をつくり出すことができたんだ」

という喜びと共に、
「苦しかったが、俺は主将の責任を果たし得たんだ」
という満足感がこみあげ、強い感激にひたつた。ついで、佐藤監督の胴上げ時に、宙を舞う監督の姿を見て、

「俺達は監督を男にすることができたんだ」
という喜びが湧きあがり、第2の感激がこみあげてきた」
と記している（『空手部創立50周年記念誌』より）。

佐藤監督とは、前述のように学連の誕生と試合実現に奔走した佐藤八十雄である。

海外普及に貢献したOB

岩井は卒業後、石油会社に就職。中東勤務時代は、アラブ首長国連邦のザイード国王に空手を教えた経験もある。他にも海外赴任中に外国人に教えたOBは数多く、空手の世界普及に大きく寄与してきた。
時代が平成になってからは、女性も入部するようになった。大澤美諭季が3年時の2004年、セルビア・モンテネグロで開かれた世界大会の形において優勝を果たすなど、女子部員の活躍も目覚ましいものがある。

空手のスポーツ化に貢献した歴史もあるだけに、部の雰囲気は明るく民主的。栗田秀哉主将（政経4・日本航空学園）はこう語る。
「学生主体で運営しているのが良いと思います。スケジュールも練習メニューも、自分達で話し合っていて決めています。上下関係は必要最小限のものだけで、4年も1年も対等。メニューについては、1年生も意見を言える環境にあります」

若い力で古豪復活を

そうした中で、今年は若い選手がのびのびと力を発揮した。中野力斗（法1・花咲徳栄）が、関東学生体重別選手権男子84kg級で優勝。古川かれん（政経1・日本航空学園）は全日本学生選手権女子個人形でベスト8に入った。彼女はナショナルチームの一員でもある。
「入学前に見学をし、雰囲気の良い感じだったので明治を選びました。しっかりと練習し、大会ではその成果をすべて出し切りたいです。そうすれば、自然と結果がついてくると思いますので」（古川）
66年を最後に全日本の優勝からは遠ざかっているが、若い力で古豪復活が期待される。（文中敬称略）